



山門をくぐり、さらに登ると洞門の向こうに本堂が見れる。本堂もまた巨大な岩山にめり込むように建っている



山門●急な斜面の岩肌にめり込むように建つ山門。仁王門と同じく火災を免れた貴重な門



堂内に厳かに祀られた須弥壇

須弥壇の釈迦如来坐像。秘仏である「閻浮檀金(えんぶだごん)観世音菩薩立像」は本堂の奥深くに



本堂●焼失後、昭和44年(1969年)に再建。銅板葺きの屋根の上に小さな楼閣を載せた造形が珍しい



本堂手前の急峻な崖地に建つ鐘楼。ここからの眺めは絶景だが登るには危険が伴う

七体もの石仏がそこかしこに祀られている。永い歴史の中で、羅漢と地藏の二つの庶民信仰が根づいていったのである。  
なお、本堂には釈迦如来像が祀られているが、羅漢寺の本尊は仏舍利(釈迦の骨)を取めた舍利塔とされる。

### 戦国期の衰退を乗り越え再び迎えた復興の時代

中世を通じて、幕府や守護大名の大内氏、宇佐神宮などからの庇護を得て繁栄の道を歩んだ羅漢寺だが、戦国の動乱期には一転、キリシタン大名の太田宗麟が領内の寺院を邪宗としてすべて焼き払い、寺は一気に衰退した。

その後、永い荒廃の時代を迎えるが、深川大寧寺の鉄村玄鸞(てつむら)禪師が入山、時の城主、細川忠興の援助を得て、寺は再び復興を遂げた。こうして、約二六〇年間続いた臨済宗の歴史は中興の祖、玄鸞によって慶長五年(一六〇〇年)に曹洞宗へと改宗された。

それゆえ、羅漢寺の大開基は足利義満であるが、中興開基は細川忠興である。なお、末寺は最盛期には四十数カ寺を数えた。戦国期の兵乱によって焼失・破損した境内は忠興によって再興されたが、残念なことに昭和十八年(一九四三年)再び出火。麓の集落の火災から飛び火した炎は堂宇を焼き尽くし、残ったのは仁王門と山門のみであった。

現在の御堂は昭和四十四年(一九六九年)に再建されたものである。

### 親しい人の顔に出逢える故人に再会できる寺

日本三大五百羅漢の一寺とされる羅漢寺。その数、五〇〇体以上に及ぶ羅漢仏は、巨大な岩壁を穿った無漏窟の中に安置されている。漏とは煩惱を意味し、無漏窟は煩惱



無漏窟の外に座る寶頭盧(びんづる)(左)と切り株の無で修行を積む羅漢(右)



山門の扁額。山号の「耆闍崛(ぎしゃくつ)」は黄檗(おうぼく)三筆の一人、即非(そくひ)禪師参詣の折の筆



無漏窟の入口。無数のしゃもじは悩みをすくう(救う)に重ねた願かけから



室町期に普賢禪師が刻んだとされる千体地藏と十王尊



自ら顔をめぐり、その下から菩薩が顔を現した羅漢



無漏窟の前にある龍の石像。戦国期の焼き討ちを全焼から防いだと伝えられる

無漏窟内の釈迦如来坐像(通称、拈華の釈迦)。無漏窟の中央、天井の一枚岩の下に祀られている

